

ロータリー語ときあかし辞典

2018 年版

ロータリー語ときあかし辞典

P.RRIMC RI2630P.PG 岐阜 R クラブ 服部芳樹

RI2630 岐阜エトス R クラブ 北川宥智

目次

まえおき・北川会員紹介

I 和訳の概念規定を要するもの

- 1) Enterprise = 事業
- 2) Ideal of Service = 奉仕の理念
- 3) The development of acquaintance = 知り合いを広めること
- 4) Vocational Service = 職業奉仕
- 5) Service Above Self = 超我の奉仕
- 6) Fellowship = 親睦
- 7) Privilege = 特典
- 8) Dues = 会費

II 語意について解説を要するもの

A 使用頻度の多いもの

- 1) 欠席補填 = Make up
- 2) 出席 = Attend と参加 = Engage
- 3) 出席免除 = Excused absence
- 4) 寛容 = Tolerance/Toleration
- 5) 社会奉仕 = Community Service
- 6) 「・・・すべき・・・」 = should
- 7) CLP = Club Leadership Plan

B 頻用されないが誤り易いもの

- 1) RI Officer = RI 中央役員と
Officers of RI = RI の役員
- 2) Rotary Organization = ロータリーの組織と
Rotary Entity = ロータリー組織
- 3) ロータリーのシニアリーダー
- 4) 特別
- 5) 1年の任期を3年(3年委員)
- 6) 徽章

III 私見として

- 1) Object of Rotary = ロータリーの目的(綱領)
- 2) 公平か公正か
- 3) ニコニコ Box (スマイル Box)
- 4) 集団か 団体か?
- 5) I serve

まえおき

ロータリー語とは・ときあかしの意義

新入会員にとって一番問題になるのは、ロータリー用語でしょう。① それは、初めて聞く者にとってまさに外国語。言葉が理解できなくては、ロータリーを理解できなくても当たり前です。(もっとも言葉をいくら知っていても、それがロータリーをよく理解していることにはなりません。) 日常のロータリー用語、それを私は、「ロータリー語」と呼んでいます。ロータリー語を分類してみると、目次のようになります。この言葉のうちには歴史や文化や哲学が秘められていて、ロータリーの本質を語っているものもたくさんあるように感じます。それは、定款・細則の成立の必然性②と同じです。

自己のロータリー観を確立するためには、知っておかなければならないことの一つでしょう。

ましてや、リーダーとしての立場にあれば、㊦ 3 ロータリー語の知識は絶対に必要です。ロータリー語の理解のためには、先ず原語である英語を確かめる必要があります。日本語だけでは、誤解の危険があります。ここらが、ロータリー語の厄介なところで、和訳のみでは「蚤の論議」㊦ 4 に ^{おちい} 陥るはめになることがあります。

ロータリーの原語である英語の和訳は、意味が正確であることは無論ですが、和訳した日本語とその用法が検討されていなければなりません。辞書的直訳ではなく、思想＝精神＝心を伝える翻訳でなければなりません。その言葉使いは、規定などを伝える概念規定の明確な言葉、理念などを表す文学的な言葉などと、翻訳する文章の性格によって選ばれなければなりません。理念などの文学的表現にあっては、そこに、概念規定の正確な「書き言葉」のみならず「語り言葉」として美しい日本語が要求されます。読み手の方も、それらを理解しなければ「読んだ」とは言えないでしょう。

古事記を書いた太安万侶^{おおのやすまろ}の時代、日本には話し言葉しかなく、文字は漢字のみで文章は漢文でしか書けなかったといわれます。そこで工夫されたのが「字音表記」で、その発想は「万葉仮名」㊦ 5 として知られています。やがて、「漢字仮名交じり」の日本語が綴られ、明治になって「言文一致体」ができました。1900年～09年は「言文一致運動最盛期」。03～04には、国定尋常小学校読本にも口語文教材が多数採用され、05～06には、夏目漱石の「吾輩は猫である」が書かれた時代です。

また、一文字でも意味のある漢字で、二～三字熟語を創ることも盛んに行われたそうです。(松浦寿輝名誉教授:歴史的宿命としての言語革新。谷崎潤一郎:文章読本)

ロータリーが日本に入ってきたのは1920年、大正9年のこと。最初ごろの例会は英語を使ったと聞きますが、然もありません、英語のロータリー語をどう日本語に移すのかさぞ苦勞があったことでしょう。米山梅吉が Service を、英語のまま使っていたとのこと納得できます。

おそらく、大正年代から昭和初期にかけて和訳された英語のロータリー語は、当時、文語体と漢語の素養豊かなロータリアンによって翻訳されたことでしょう。そして、それまでの日本人にはなかった思想や文化、即ち、その意味を表現する日本語がない「概念規定の英語」を、これもまた元は外国語である「漢字(文)」に置きかえるのですから、まったくの創造「造語」も止むを得ず、そしてそのような性格の「和訳

＝日本語独自の意味のロータリー語」が、現代の常識的な日本語（漢字）の意味とかけ離れていても、これも止むを得ないことです。我々の先賢は、太安万侶と同じ苦勞をしたことでしょう。

原語である英語に忠実であることは無論ですが、「直訳的＝辞書的な忠実さ」の追求ではなく、その言葉の持つ概念規定の思想的翻訳とでも言った和訳に接する時、先賢の「言葉＝言語＝日本語」の深い造詣、ロータリーの「哲学＝思想」に対する鋭い洞察力、それに生命いのちを与える情熱に打たれました。

そしてこの先賢の驚異的な叡智、即ち、異文化異原言語の思想を日本語に移しかえる知的作業は、日本の伝統文化の魂を容れることによって、そこに独自の新たな価値を創造し、日本の誇る成熟した強いロータリーの大河の、その源流になったものと考えます。

この先賢の業績を垣間見た瞬間、それだけで、このロータリー語の仕事(Enterprise!)の効かいがあったと感激しました。

それはまた、「言霊ことだま」の存在を目の当たりにし、教えられた「Vocation」の境地を感じた瞬間でもありました。

これらの結果生まれた最たる例が、「職業奉仕」という辞書にない日本語の創作であり、その翻訳された理念の体得と実践は、日本のロータリアンの奉仕活動の基礎になったことも納得できます。

それでは、視覚的にも無意識のうちに意味を捉えてしまう現代日本語としての漢字や漢語の概念規定の呪縛じゅばくを離れ、ロータリー語の成立の必然性を解明することによってその言葉の意味の定義を試み、ロータリーという「不思議の国」の扉を開きたいと思えます。

④1

ロータリーの情報ハンドブックは、ロータリー用語集として1000語近くの解説が収載された大作ですが、「出席」に関して言えば、出席既定の免除、出席義務、出席クレジットなど、主に制度や規定、組織についての解説で、それが成立した必然性「原意」が解らない言葉は沢山あります。（2017年版ロータリー情報ハンドブック；ロータリー情報研究会刊；歴史的年号などはこれに拠りました）

㊦ 2

一見無味乾燥な「規定」も、なぜこの定めができたのかと、その成立の必然性を解析する時、ロータリーとして「かくあるべき考え方=魂」に触れることが多々あります。

㊦ 3

ロータリーのリーダーの資質の、重要な条件の一つに「正確な文書の作成」があります。本文はその意味で、リーダー向けに叙述した部分もあります。

日々のロータリーは、学問ではありません。しかし、ロータリー章典などの規定を理解することに加え、歴史的考証、理念の理論的解釈などによって、その「魂を描き出すロータリー学」を習得することは、リーダーの資格の第一条件です。

㊦ 4

蚤の論議

あるとき、ネコの頭に住んでいる蚤と、腹に住んでいる蚤が、頸のところで出合いました。頭に住んでいる蚤が言いました。「ネコは玉のようにマンマルのものだ」。腹に住んでいる蚤が言いました。「ネコは原っぱのようにヒラペッタイものだ」。眷属共も集まって、その論議は喧々諤々果てしなく続いたそうです。

㊦ 5

漢字で言葉を記すしかなかった時代において、個々の漢字のもっている意味をヤマト言葉に置き換えた書き方「訓字主体表記」、漢字のもっている意味を捨て去ってその音のみを用いる書き方「字音表記」をおこなうしかなかった。（上野 誠：万葉集から古代を読みとく；から）

北川宥智会員 紹介

岐阜エトスロータリークラブ所属。平成 26 年入会。現在、理事・公共イメージ委員長。

岐阜県各務原市、高野山真言宗高家寺住職。

昭和 38 年一宮市生。高野山大学大学院密教学専攻修士課程修了。

名古屋の栄中日文化センター・岐阜中日文化センターの講師。

専門は、真言密教（曼荼羅・仏像・般若心経等）・地球環境倫理（季節の行事）

尾張七代藩主徳川宗春の研究（著書あり）等。

この辞典を作成するに当たり、北川宥智会員のコメント（各項に〈北川コメント〉として収録）をいただき、数度にわたる教授を受けることができたことは、天為としか

言いようがありません。幾度かの会談によって、論旨の解釈の誤りに気付き、また、改めて必要性の示唆を受け、加筆訂正した箇所は沢山あります。ここに深甚の感謝を捧げます。

北川氏との会話の中で、仏教に説く、^{ろくはらみつ}六波羅蜜、真言密教の五智など、ロータリー語に意識すればそのままロータリーの思想を語るができるかのように感じました。無論私には、辞書的コピペ知識しかないのですが、仏教思想、特に真言密教のそれとロータリーの思想が、極めて近似していることは間違いのないと思いました。

仏教的思想にも造詣の深い先賢の、叡智の結晶ともいえる貴重な和訳のロータリー語、キリスト教の影響下に生まれ、仏教思想の知的フィルターを通して創作されたロータリー語は、日本独自のロータリー観、その思想・文化を形成する強い原動力となり、その発展の方向を定め、伝統として結晶して行ったのでありましょう。それは、職業奉仕の理念が、日本の近世以来信奉されて来た商道德、家訓と近縁の考え方であったために受け入れられ易かったのか、独自の立派な成長を^と遂げたことと同じです。しかし反面、その^{はんちゆう}範疇での固定観念に^{かいら}捉われて、R I との^{おちい}乖離などと狭量な解釈に^{いな}陥ったことも、また^{いな}否めない事実です。

ここにおいて日本のロータリーの伝統は、「奉仕の理想」という根本理念を^{バックボーン}背骨に、世界に誇るべき独自性を持った「心と相」を形成しています。したがってその伝統は、世界の趨勢に背を向けるとか、旧態墨守などはまったく次元の異なった不易なるものあります。

仏教的表現を借りれば、大日如来と五智如来の関係とでも言えばよいのでしょうか。

根本の思想は不易ですが、民族によって文化が違い、宗教に宗派があるように、その解釈が異なっても、即ち、それを表現する言葉＝ロータリー語が異なっても、異なる故に貴いことを理解し、その解釈を互いに尊重し、多様性の寛容を以て受け止めてこそロータリーであると思います。㊦

日本の伝統を誇り、この^{まじし}旗幟を高く掲げることが、未来の発展を約束する道であると考えています。

㊦

蛇足ながら、「不易なる伝統は革新という流行によって守られる」ものであることは周知の事実ですが、言うまでもなく革新・改革は、「旧き」を否定することではなく、その否定は破壊と言います。取捨選択の価値判断は、古い新しいではなく、同じパラダイムの中での「良き悪しき」「合う合わぬ」です。と言うと皆様には、^{しやか}釈迦に説法。

そして「心」は不易なるものであっても、流行によって心の現れである「姿」は変化し、それに伴って「心の相」も変化することは無論です。

<北川コメント>

五智如来

五智如来とは、中央大日如来、東方阿閼如来、南方宝生如来、西方阿弥陀如来。北方不空成就如来の五人のこと。それぞれ法界体性智（あらゆる覚りの境地の集合）・大圓鏡智（ありのままに映す覚りの境地）・平等性智（ものごとの公平性・平等性を観る覚りの境地）・妙観察智（ものごとの違いを見極める覚りの境地）・成所作智（行動しものごとを完成させる覚りの境地）を司っています。

また、阿閼如来は強い意志を、宝生如来は目的を、阿弥陀如来は知恵や慈愛を、不空成就如来は行動を意味する仏でもあります。これは四つのテストにとっても符合します。大日如来を除く四仏はそれぞれに特徴（性格・色・持ち物など）があり、独立しており、そこから派生する菩薩たちは各々に特性があり様々な動きや変化を司っています。しかし、四仏も・派生した諸菩薩も、いずれも大日如来が原点であり、大日如来の顕れの一部。不易なるものは大日如来であり、流行は四仏および諸菩薩ともいえるでしょう。仏教、特に弘法大師のもたらした真言密教の思想は、平安・鎌倉・室町・江戸時代を通じて、言葉も文化も深く日本に根づいています。教養のある人達は自然にこれらを身に着けておられ、それがロータリーを日本に輸入したときに大いに役立ったように見受けられます。そのために仏教用語が前提にある訳語が少なくないようです。

尚「ときあかし」の解釈を「絶対正しいもの」として押し付ける気持ちは毛頭ありません。現在のロータリーには、このような理念とか、哲学とか言ったもの、たとえば決議 23-34 や、既存の職業奉仕理念を不要なものとする一部の主張もあるようですが、このような価値観や人生観の相違による二極分化は、多様性の名の下に認められるところであり、それがクラブの性格を決定している場合、どのクラブに所属するかを選ぶのは、ロータリアンの自由です。現在は、ロータリアンがクラブを選択する時代です。

但し、二極の何れが今後の発展を約束されているかは「昨日のない今日はなく、今日のない明日はない」。ロータリーという思想に共感し感動した先賢が、どのような想いをこめて「昨日のロータリー」を築いたか「温故知新」。そして「彰往考来」。「今日の

ロータリー」を考え「明日のロータリー」の発展のために、ロータリー語の解析は必要なことであると考えてこの稿を始めます。

【I】和訳の概念規定を要するもの

1 Enterprise = 事業

綱領主文。

「・・・ as a basis of worthy enterprise …… 意義ある事業の基礎として・・・」

Enterprise :

世界初の米国原子力航空母艦の名である。このことから想像されるが、

Wikipedia では；「事業 冒険」とだけ書き込まれている。

Random House には；1) 「事業 大仕事 (特に重要な または大胆さ 精力を要する)

事業 :

日本語大辞典で；1) 「仕事 しわざ」

2) 経済活動としての解釈

以上のデータから、「事業」の概念規定を（主文に於いては）企業理念などと狭義に解釈せず、4項すべてにかかるから「事業」は広義に解すべきと考える。

「事業」には、社会貢献の意も含まれているので、社会奉仕事業、国際奉仕事業、青少年奉仕事業などの使い方がされており、五大奉仕に沿った奉仕活動は、すべて「事業=気合を入れて行う大仕事」である。

綱領 第2項においても、「事業」には当然企業理念の意も含まれているが、その解釈のみで企業理念と狭義の概念規定をすると、五大奉仕に定義された職業奉仕の条文にある集団奉仕活動の説明がつかない。

As・・・をかのか？

as の和訳の「の」が「を」であったら、ということがテーマ(上野 考 PG:のとをの

違い) になり、職業奉仕において enterprise を狭義に解釈して、企業理念の意味にしたとき、即ち、職業=事業、との意味合いから見ると、奉仕の理想を事業「の」基礎として、即ち、企業理念に奉仕の理念を基礎にしようとなるが、「を」では、これが逆になり、・・・事業「を」基礎として奉仕の理念を奨励し・・・即ち、職業で得た利益を奉仕に使う意味になる。

某 P G が、「職業奉仕とは、稼いだものを奉仕事業に使うことではない。稼ぎ方を言うのである。」と言われた由だが、まさに言い得て妙である。

「の」なら I serve、「を」では We serve 的になるだろう。Enterprise を広義に解釈した時は、「を」では意味が不鮮明になってしまうのではないだろうか。

<北川コメント>

事業・enterprise

英語圏の方々は、enterprise を「良き意味での冒険心」を持っている言葉であると考えています。いわゆるフロンティアスピリットです。世界的な人気テレビ番組シリーズの「スタートレック」の歴代の艦名は「エンタープライズ」です。そのエンタープライズが航行するのは最後のフロンティアである宇宙。フロンティア精神を尊ぶ、特にアメリカ人にとって、enterprise とはとても重要な表現です。

一方、日本人は、伝統を重んじる傾向にあり、必ずしもフロンティア精神を重要視していません。ですから、アメリカ人が持っている感覚と、日本人が持っている感覚とのずれが最もよくあらわれているのが、この enterprise という言葉のようです。

言語学的に見ると、「ロータリーの綱領」主文の enterprise は不可算名詞で記されています。可算名詞であれば「企業」「事業」とされますが、不可算名詞には基本的には「企業」「事業」の意味は薄くなっており、むしろ「進取の気性」「冒険心」という言葉に妥当性があります。

『ジーニアス英和辞典』では、不可算名詞は「進取の気性」「冒険心」のみ。可算名詞としては、「企業」「事業」とされています。もし単純に「事業」「企業」とするならば、a basis of a worthy enterprise または a basis of worthy enterprises となっているはずですが、あくまでも綱領は不可算名詞を用いています。

『プログレッシブ英和辞典』では、「(困難を伴う大きな) 事業 (を行うこと)」も不可算名詞としていますので、事業という用語も可能ですが、あくまでも「進取の精神」「困難を伴う大きな」という意味が必要のようです。

ここから鑑みるに、ロータリーの事業とは、project のような小さなものではなく、その原語の enterprise は「広義に解すべき」ものといえます。

ロータリーの五大奉仕事業はあくまでも enterprise 困難を伴う大きな事業であり、projects・undertakings・works・industries のような小さなものではないことを知っていなければなりません。五大奉仕は、形式的に行う project ではなく、「世間から求められていながら、なかなか実現に難しい事業」といえます。そしてこの困難に取り組むことこそがロータリアンの enterprise 事業といえるのではないのでしょうか。

2 Ideal of Serve = 奉仕の理念 (旧訳 ; 奉仕の理想)

Ideal :

綱領主文。

Random House には ; 1) 理想。

2) 完成度の最高水準、極致・

3) 手本・

4) 努力目標・

Random House には ; idea は哲学用語として ideal と同義。

理念 :

新英和大辞典で ; [理念] は ; Idea. Doctrine. Ideology.

日本語大辞典で ; 理性によって得られる最高の概念。

大漢語林では ; 独語 Idee の訳。哲学で、経験では得られず、理性によって理解される最高の考え。

理想 :

大漢語林では ; Ideal の訳語。努力して到達しようとする目標。

また、心に思えがく完全な状態。

日本語大辞典で ; 哲学で、人間の理性と感情を十分に満足させる最も完全な状態。

現実の状態の発展の究極として考えられた最高の形態。

実現可能な相対的な究極状態と、実現不可能だがそれでも行為を促す絶対的な状態 (神、最高善、永遠) の二つに分かれる。

理念でも理想でも意味は通じるが、理想の方がこの^{フレーズ}句の意義を強く訴えるように感じる。即ち、ロータリアンの到達すべき「究極の努力目標」の意である。ロータリアンを定義するならば、その目標に到ろうと努力する人である。もし私が、ロータリーを「一言^{ひとこと}

で言えば」と訊かれたら、躊躇^{ためら}わず「奉仕の理念の理想的な在り方を学ぶ集団」と答るだろう。

「奉仕の理想」の「の」の使い方が問題なのだろうか。理想では解^{にく}かり難いから、理念になったのだろうか？とすれば；

「かのときに言いそびれたる大切の ことばは今も胸に残れど」

この啄木の歌が詠まれたころの日本語の「の」は、今日なら「な」と書く。この日本語の助詞の用法の変化に従へば「奉仕の理想」は、今日的な言葉で「理想的な奉仕の在り方」と表現することができ、全てのロータリアンの「努力目標である」と言うことを強調できるだろう。

<北川コメント>

ideal 理想か？理念か？

大乘仏教、特に真言密教では無^{むじゅうしよねはん}住処涅槃という言葉^{を大切にします}。覚^さって寂^じ静^{じやう}な境地に住して何もしない「静」の境地を理想とはしません。あえてそのような個人的な境地に住せず、慈悲に基づいて誰かのために何かをし続けていく「動」の境地を究極の覚りの境地としています。ロータリアンの理想は、まさにそうした「動」の境地。これは理念であると同時に、理想の実践です。

Service=奉仕

ロータリー語のなかで最も重要な言葉。この意味を知らなければ、ロータリアンではないとさえ言われている。

「Service=奉仕」と訳されているが、しかし、「奉仕」と「Service」では現在その概念規定がかけ離れてしまい、原文の英語と日本語とが乖離した状態にある。

ロータリーが理解され難い原因の一つ。（いっそ万葉仮名風に「紗阿美寿」と書いたほうが通用するのでは！もしくは「布施^{サービス}」とでも。）

Service :

Random House には；第1義に、役に立つ働き

以下・・・第16項「♀に対する♂の・・・」

18項目もの和訳がある

これらいずれも 「自己の肯定」=我在り

サービス：

ではサービスとカタカナ英語で表記しては？

かつてカナ書き「サアヴィス」と言われていたこともあると聞いているが、このカタカナ英語は、現在では用法が多様に分類されていて、ロータリー語としての概念規定には解釈し難くなっている。

Wikipedia では；第3次産業などの経済用語の解釈が大量に書き込まれている。

奉仕

- 日本語大辞典では；
- 1) 長上・神佛・君主・師に謹んで仕えること
 - 2) 私心・自己を棄てて尽すこと
 - 3) 客の得になるよう計らうこと

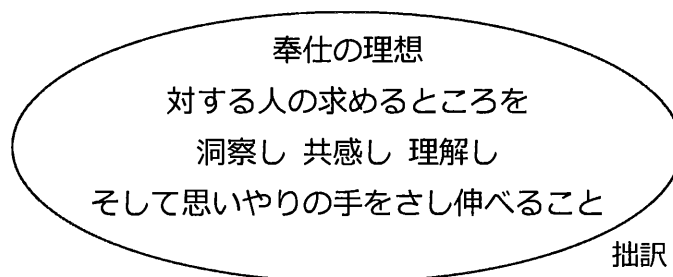
大漢語林も；ほぼ同様

これらいずれも 滅私奉公「自己の否定」=没我

ロータリー語としての意味（概念規定）は？

以前 R I の発行していた全世界のクラブの名簿 Official Directory に記載された “Ideal of Service” この解釈は公的なものと考えられる

・ ・ the “ Ideal of Service ” which is
thoughtfulness and helpfulness to others.



そしてこれは、

「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもその通りにせよ」
という黄金律の実践指針である。

ロータリアンは、二つのモットーを実践方法として掲げている。

そしてこれは、いわゆるロータリー精神の定義でもある。

奉仕の理念は世界共通、ロータリー哲学の原点中の原点。

ロータリーは、これに始まりこれに尽きる。

その心ひとつに結ばれた Fellow がロータリアン。

その集団がクラブ。

「思いやりの心」を持っているだけでは、ロータリアンではない。手を差し伸べる「行動」があって初めて、ロータリアンである。この「行動」が集団として＝クラブとして実践された時、これを XX 奉仕事業＝プロジェクト (Enterprise) と呼んでいるのである。

⑨

「奉仕」と「親睦」は、ロータリーという車の両輪といわれ、頻用する言葉ですが、原文の英語と日本語の漢字（漢文）の概念規定が乖離している「ロータリー語」の双璧です。洋の東西での思想の違いが、如実に現れています。ロータリー全体に対する考え方・見方にも現れているところで、留意しなければなりません。

この根ざすところは、「我＝個＝I」の捉え方の相違でしょう。

「人と人との間にあるから人間という」と教えられましたが、これは日本でしか通用しないではないでしょうか。いつも人の目を意識し、人の迷惑にならないように心がけること、この極^{きわ}みは「没我＝滅私＝己を棄てる＝（行き過ぎると）捨身」ではないでしょうか。

例えば、平安朝の寝殿造り、次に書院造り、昭和の初期までの住宅の、個人を隔てるものは「可動間仕切り」であり、常に他人の気配を感じつつ暮らしていました。将に「人と人との間^{あいだ}」です。これに比べ、西欧・米国など「人とは迷惑をかけあうもの」といった考え方があり、住居で言えば「個が独立」できる固定間仕切りの中で暮らしています。

仇討映画で見る、日本の侍は唐紙一重で隣と筒抜けの宿場に、西部のガンマンは駅馬車の着くホテルの個室に居るようなものです。これは、農耕民族と狩猟民族の違いとも言われています。

この「個」に対する考え方の差は、「超我」と「没我」の「奉仕の解釈」にも通じ、I serve の「I」、二つのモットーの「He」「One」と称する「I」などなど、ロータリーの理念を語るときの「I」の姿として捉えることができます。

<北川コメント>

奉仕

奈良時代から江戸時代まで 1,200 年の間、日本でも「奉仕」という言葉は用いられていました。しかし、その意味はかなり限定的です。如来や菩薩・僧侶・師匠・尊敬すべき行者などに仕えることを「奉仕」としていました。

奉仕という言葉には、元々は社会奉仕などの意味はありませんでした。service の元である serve も元々は「仕える」という意味なので、原義的には service を奉仕と翻訳するのは間違っていない。英語では serve 「仕える」は派生して service となり、「役立つこと」を意味する言葉となっていったようです。

『ロングマン英英辞典』は、「誰かのために何かをする」と述べています。

では、日本語には service に対応する言葉はなかったのでしょうか？実は、英語の service とまったく同じ用法で用いられている言葉が日本にもありました。それが「布施」です。

「お布施」というと一般的には、お寺へ財物を捧げる財施であると考えられていますが、実は「布施」の本当の意味は少し異なっています。六波羅蜜（大乘仏教の基本的な六つの修行法）の第一が布施。「自分が持てるもので誰かのために何かをすることである」と規定されています。布とは「弘く」を意味する言葉で、布施とは弘く施しをすること。基本は自らの意志で自らができることを誰かのために何かをすること。

金銭や物で行う布施は「財施」、正しい教えを弘め伝えることを「法施」、恐れる者の側において恐れを抜くことを「無畏施」といいます。

財施ができない場合、『六十卷華嚴経』は「十善戒」を布施としています。十善戒とは「殺さない（不殺生）」「盗まない（不偷盗）」「倫理に反する淫らな行動をしない（不邪淫）」「嘘をつかない（不妄語）」「飾りすぎた言葉を使わない（不綺語）」「悪口を言わない（不悪口）」「二枚舌を使わない（不兩舌）」「貪らない（不慳貪）」「怒らない（不瞋恚）」「間違った見方をしない（不邪見）」の十種。

『雑宝蔵経』には 優しい眼差しの眼施・微笑む和顔悦色施・気持ちのよい言葉の言辭施・身体で奉仕する身施・心のなかで相手を思う心施・座席などを譲る床座施・軒先を貸す房舎施という「無財の七施」が記されています。

布施の基本は個人ですが、財施や身施などを集団でおこなうことを否定しているわけではありません。自分に持てるもの（できること）で、誰かのために何かをするのですから、集団であっても個人であっても構わないのです（しかも利益を得てはならない

わけでもありません。暴利は戒められますが、次の活動に必要な利益は認められています)。ただし、基本は個人に判断が求められます。団体に強要されるものでもありません。このあたりが、日本のロータリーでいう I serve と、大乘仏教で説く布施が一致しているところのように思えます。

何千年もの間、日本を含めアジア地域では布施行を大切にしてきました。だからこそ日本はロータリーの理念の原則を守ろうとする基盤があるのではないかと思います。「自分の持てるもの(できること)で誰かのために何かをする」という布施の本来の意味は、ロータリー用語の Service 奉仕と一致するのではないのでしょうか。

3 The development of Acquaintance = 知り合いを広める

綱領第一項「知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること」。

Acquaintance :

Random House には ; 1) (ちょっとした) 知り合い、顔見知り。

(友人ほど親密でない) 知人、知己。

2) 知り合いであること、交際・・・

知り合い :

日本語大辞典で ; 「知り合うこと」 また、「知り合った相手の人 知人」・・・

Random House と同じく、両様の意味が説かれている。

Development :

Random House には ; 1) (生物の) 発育成長 (事業などの) 発展拡張。

(事業 局面の) 進展、展開。

広める :

日本語大辞典で ; 1) その勢い 範囲を広くする、豊かにする・・・

Membership development は増強と訳され、development は増加の意味で使われているところから、The development of acquaintance は知り合いの「人を増やす」ことの意も含まれているように感じられるが、それにもまして、「交友を深くする」ことの意が表立っているように考えられる。

旧訳「奉仕の機会として知り合いを広めること」は、知り合いの人を増やすことによつて・・・と教えられたが、新訳の方が「自然にその交友を豊かにせよ」とのニュアンスが強い。

<北川コメント>

acquaintance

綱領の第一の” The development of acquaintance” は、acquaintances という複数形ではなく acquaintance という単数形であり冠詞ありません。可算名詞ではなく不可算名詞です。

可算名詞の acquaintances ならば、(friends ほど親しくない) 知人・知り合いという意味となりますが、ここではあくまでも不可算名詞の acquaintance であり、意味的には「面識」「交際」「知識」という意味が前面に出てくるのではないのでしょうか？そうするとメンバーを増やす増強というよりも、「互いの面識を深めること」と、「より広範囲の面識を広めていくこと」の両者が大切になってきます。

日本語の増強を、増と強に分けて捉えるのも、あながち日本オリジナルではなく、むしろ原意にかなっているように思います。

4 Vocational Service = 職業奉仕

最も難解なロータリー語である。原語である英語も「後付け」^{㊦1} 訳語は「造語」、言葉に囚われていては本来の理念も活動（実践）も不可解となるも当然。不可解なままを1時間以上も講義されたのでは敬遠されて当然。

㊦2

ここでは、言葉の問題に限って述べる。

Vocational

Random House には；職業（上）の。・・・という和訳しかないが、Vocation の派生語として考える時、もう少し重い意味が籠^{こめ}られているように感じられる。

Vocation :

日本語の概念にはないので、漢字での和訳はできない。Super Natural な Something Great (キリスト教では神とも) の「^{おぼ}し召し」によってその「職」に就くを得ることであり、その仕事に打ち込んでいるとき、「あ！今私は Vocation のなかにいる」と天啓に打たれるもの・・・と教えられた。

日本語の「召命」に近いようである。

そしてその「職」は、「=収入を目的とする職業」だけを指すのではないが、その「職務」に精進することを、Vocational Service と言えよいのだろうか。むしろ、ロータリアンの在り方を指しているかのようである。

シエルドンの説いた職業奉仕には、Vocation は使われていないとのこと、また綱領にも使われていない。㊦3

職業：

大漢語林では； 1) 官職上の仕事。

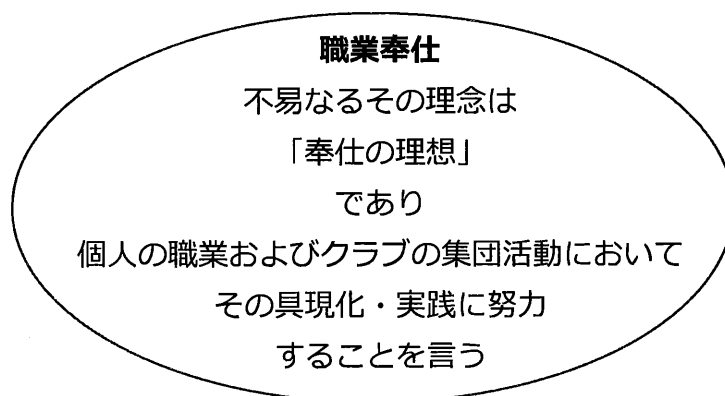
2) 生活のためにする仕事。

日本語大辞典では；暮らしを立てるために日常従事する仕事、^{なりわい}生業。

Vocational Service の和訳に、辞書にない言葉「職業奉仕」が当てられているが、言葉の上からすれば、「収益を得るに、奉仕の理想の実践を以てせよ」という概念規定ができる。しかし、これだけでは狭義の解釈である。これ以上は、ロータリー語の範疇を超えるのでここまでとする。

結論として、

「職業奉仕」の概念を、あらたに**ロータリー語**として規定しなければならない。



㊦1

1927年奉仕活動実践のために、英国のクラブから「目標設定計画」が提案され、三大奉仕（現：五大奉仕）の概念が生まれたとき、その中で、職業奉仕の名称は、**Business Method** から **Vocational Service** に変更されています。これによって、より高い倫理^{こうりつ}昂揚運動となり、例会で商売の話は禁忌になったり、特に日本では、ともすれば行きすぎた理論展開となって、「例会食に霞^{かすみ}を出すつもりか、綺麗事^{きれいごと}は聴きたくない」との声が上がるようになったことも事実です。

㊦2

日々のロータリーは、学問ではありません。また、悟りを啓^{ひら}こうと精進する、宗教でも

ありません。ロータリーの「^{おしえ}教」は、良きと悪しきを併せ持つ人間性を認めての上にあります。

④3

Object of Rotary で使われている「職業」の原文は：

職業上の ; in businesses and profession

役立つ 仕事 ; useful occupations

ロータリアン各自の 職業 ; each Rotarians occupation

事業 ; business

職業人 ; business and professional persons

<北川コメント>

vocational と business

英国のクラブが「目標設定計画」が提案した 1927 年の前後、世界は政治的に激動の時代に突入していました。イギリスでは労働党が初めて政権を握っています。ソ連のトレンキーが追放されスターリンの独裁が始まり、ドイツではヒトラーの『我が闘争』が刊行され、ナチスの親衛隊が設立されました。イタリアでムッソリーニが政権を握っています。独裁的な政治が世界中で生まれた時代でした。また経済では、チャプリンが『黄金狂時代』という映画を制作し、その当時の business のあり方を風刺しました。イギリスの BBC 放送が始まったのもこの頃です。そして 1929 年の世界大恐慌へとつながっていきます。こうした時代背景があり、単純な business ではなく vocation という言葉がロータリアンに認知されたのではないのでしょうか？

日本の伝統を見つめると、商売繁盛の神様の一人は恵比寿さまです。左手に大漁を意味する鯛を持ち、右手には竹でできた釣り竿を持っている姿です。恵比寿さまはその起源に遡ると予言や再挑戦などをも意味する神様ですが、大漁と商売繁盛が主な役割です。ところが右手に持っているのは網ではなく釣り竿です。「釣りして網せず」、網で根こそぎ奪うのではなく、釣り竿での大漁、つまり最適の大漁を意味します。この恵比寿様に表れるように、日本の商売は倫理的な大漁を推奨しています。利益は否定しないが、網が意味する暴利は規範から外れています。

business という言葉は、busy (忙しい) という言葉が原義にあります。

『ランダムハウス英和辞典』は、business を潜在的には「特に商業のような営利を目的とする活動」と規定しています。深読みすると、この営利を「網」でする暴利なの

か「釣り竿」でする適度な利益なのか、20世紀初頭の問題に対して、ロータリアンは正面から取り組もうとしたのではないのでしょうか？だからこそ、businessではなく vocation という「天命」「神のお召」という意味を含んだ言葉を用いたのではないのでしょうか？

5) Service Above Self = 超我の奉仕

Self:

Random House には ; 1) 自己 自身・・

3) 私利 我欲 利己心・・

用法に rise above self = 自己を超越する

超我:

使用した辞書には見当たらず。没我はあっても超我はない。しかし佛典に使用例ある由。

我:

大漢語林で ; 1) われ

2) わが

3) ・・独りよがり 「我執」 = 「我見」

我執 = 自分の気持ち・意見に固執すること。

我見 = ・・自分だけの狭い誤った意見。

日本語大辞典では ; ・・ 3) 自分勝手なことを主張して人に従おうとしない心。

以上のデータから、**超我の奉仕**には複数の意味を考えることができる。

- 1) 利己心を超越して奉仕せよ。(捨て去れとは説いていない) 決議 23-34 第一項にあるように、利己と利他を併せ持つ「我」の人間性を認めるが、利己心と利他の心のシーソーを利他に傾けるよう努力せよ。その方法を学ぶ処がロータリーである。
- 2) 我執・我見に囚われることなく(捨て去れとは説いていない) 奉仕活動をせよ。奉仕対象のニーズを満たすようにせよ。独善的なお恵みは有難迷惑。
- 3) 自己を拘束するあらゆる呪縛を解き、より広い自己を ^{こころざしたか} 志高く求めよ。

そして「超我の奉仕」は、「最も良く奉仕する者 最も多く報われる」のである。

即ち、最も良く 超我の奉仕 をする者 最も多く報いられる。

㊦

「奉仕の理想」「黄金律」「二つのモットー」等々と、同じ道の理念です。

ここで、没我の奉仕と超我の奉仕とどちらが上か、などと蚤の論議をしても意味のないことです。確かに、没我という仏教の「捨身慈悲滅私献身^{しゃしん}」に似た境地は、ロータリーにあっても理想の在り方かも知れませんが、ロータリーは我欲我執の塊である「我」を認る。人間的な生活の中で、より良い姿を求めて行くところに魅力を感じています。

<北川コメント>

above oneself・超我

「超我」という言葉は、『大正新脩大蔵経』の中で、五例あります。「我執を超える」（自分というものへの執着することを超える）という意味で用いられています。これは、否定を否定した言葉遣いです。つまり一度は欲望に満ちた世界の我執を否定するものの、それでは社会も個人も変わらないという現実を見つめます。その上で、我執を否定し考えをもう一度否定して、現実的に生きていくというもの。我執は否定するものですが、現実世界は我執により成り立っている部分が多いのも事実です。だからこそ我執を逆に利用していこうということです。

それを、仏教では「超我」とか「大我」といいます。『大日経』というお経を人の姿で表した不動明王などは、まさに大我・超我の表現です。不動明王の誓願は徹頭徹尾、奉仕をすることです。だから召使のようなお姿をしています。あえて、いうならば、超我や大我は、自分の否定（没我）ではなく、自らを規定して縛り付ける小さな枠を外す考え方です。

「超我」とは、日本のロータリーで、仏教の素養があった方が用いられた訳語ではないでしょうか。また above oneself は、洋の東西を問わず、人間の心の奥底に共通した考え方なのかもしれません。

6) Fellowship = 親睦

誤解して多用されることでは、最高峰のロータリー語。

Fellowship :

Random House には ; 1) 仲間同士 仲間であること 会員であること . . .

2) 交わり 親交 仲間意識 連帯感 . . .

3) (利害・感情などを共にする) 共同体 . . .

以下・・・

親睦：

日本語大辞典では；互いに親しみ合い、仲よくすること。

慶応再販英和対訳辞書 Acquaint 知らせる・・・親睦する㊤

大漢語林には；・・・親しく睦まじい。

Fellow「一つ心に結ばれた仲間」と「親睦」では交わる線は細い。どの様な考えで、または、どのような意図で、この漢語が和訳に充てられたのだろうか？英語の原意とは、似ても似つかぬ解釈がされていることが多い。

「ひとつ心の仲間という考え方＝理念」があり、その絆を強くするために活動がある。それが飲み会であったり、ゴルフコンペや家族旅行や観桜・観月例会という手段である。新会員のために始まった炉辺会合 Fireside Meeting と呼ばれる I F Mなども、この目的を持っている。

㊤

Rotarian という Fellow は、Acquaintance の付き合いとも言われているところから興味深いところです。この中から Friendship が生まれると説かれています。正確には、明らかにこの両者の人間関係は異なるものでしょう。

軽い気持ちで「君は僕の友達」という場合はよいのですが、大きな会合で司会者が「ロータリーの友情に免じて」といった時「僕は君の Friend ではない」とつぶやいているのが聞こえて、なるほどと思ったことがあります。どうも、違和感を拭えませんが、せめて、「寛容の心を以て」不行き届きの許しを請うては。

「Fellowship 増進例会」と称して、例会は歓談のみでビールが出たので驚いたことがあります。「これマジ」と云いたくなったのですが、会長も極めて普通のこととして考えていました。

もともと、例会前にビールなど提供するコーナーを設けて、「和気藹々の親睦・・・」などと自慢するクラブもあるとか。かたや、例会場は国旗と誇りあるクラブ旗を掲げた道場と心得、入退室には一札を以てするクラブもあり、その是非は問いませんが、ロータリー語の解説も無駄ではないようです。

<北川コメント>

親睦・・Acquaintance・Fellowship・Friendship

「親睦」という言葉は、中国の隋時代(581年 - 618年)に既に使われていた言葉です。「相(あい)、親睦し尊重し愛念し安忍す」という言葉が『合部金光明経』というお経の中で用いられています。

fellowship は、不可算名詞で、『ロングマン英英辞典』によると、「興味と体験を共有した結果として生じる感覚または友情」とされています。

ロータリアンは、共に学び、共に事業をし、そこから生じた友情を大切にすることでしょう。ロータリアン同士の基本は acquaintance (単純な知人)。そこから companionship (仲間づきあい)、さらに friendship (友情) へと進んでいくものなのでしょう。これを見ると developing acquaintance には、fellowship によって、ロータリアン同士が companionship、さらに friendship へと進んでいくことをも含有した言葉ではないかと考えさせられます。

GOOD WILL と BETTER FRIENDSHIP

四つのテスト第三には「好意と友情を深めるか」とあります。英文では 'Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIP ?'

『ジーニアス英和辞典』によると、Good Will' は「善意」とされています。

『広辞苑』によれば善意とは、「①善良な心②他人のためを思う心。好意。」などとされています。

Good Will を好意とする翻訳は的確な表現です。しかし、現在の好意ということばは、恋愛感情など意味して「相手が好き」というものであり、「善良な心」「他人のためを思う心」という意味が薄れているようです。四つのテストの「好意」とは、原義的には「相手を思いやる心」であると知る必要性を感じます。

friendship は friend (友人) の派生語で、「友人関係」という意味です。

『ロングマン英英辞典』によれば、friend は「知っていて、とても好き (very like) であり、共に時間を費やす相手」とされています。

BETTER FRIENDSHIP とはより良い友情関係。この friendship は単なる acquaintance 知人ではなく、もっと深い関係が前提となっています。

共に難しい事業 Enterprise に挑戦し、互いに思いやり、良き友情関係を築いていく、こうしたことが四つのテストの第三。ロータリアンだから友人なのではなく、ロータリ

アンとして共に時間を費やし思いやることで友情を育んでいくものなのでしょう。ロータリーとは友情を築いていく場であるともいえます。

7) Privilege=特典・Dues=会費

ロータリークラブ定款第 18 条 ロータリーの目的（綱領）の受諾と定款細則の順守

「会員は、会費を払うことによって、ロータリーの目的（綱領）の中に示されたロータリーの原則を受諾し、本クラブの定款細則に従い、その規定を順守し、これに拘束されることを受諾するものとする。そしてこれらの条件の下においてのみ、会員は、本クラブの特典を受けることができる。・・・」

Privilege :

Random House には ; 特権 特典・・

出生 地位 努力 認可などによって得られた権利（便益）

特典 :

日本語大辞典では ; 特別の規則・・特別の扱い 特別の待遇や恩典

ロータリークラブへ入会して最大の特典は、クラブの例会への出席権であろう。

RI 細則 4.100. 「会員は、いつでも他クラブまたは他クラブの衛星クラブの例会に出席する特典を持つものとする。・・・」

何時でも何処へでも、自分の意思だけで、世界中の例会に出席することができ、誰の隣にでも座り、対等に話ができる権利である。このような集団や組織は、そんなにあるものではなかろう。

数年前地区では、会員特典委員会の設置を推奨されていましたが、Member's Benefit Committee の和訳で、このような Reward Program を特典と訳すのは、例会出席軽視の傾向の現れとみるのは僻目ひがめでしょうか？

会費 :

会費は第一に、前記 18 条に示されるように「クラブへの誓約金」の意味がある。そこから、RI 分担金、雑誌購読料、地区賦課金等、クラブ（運営）費・・。会費は例会の食費ではない。飲食費は本来別項目のもの。その他に、R 財団・米山記念奨学会・ニコニコ Box・災害救援拠出金などの寄付があることになる。

⑨

入会金：

2016年版ロータリークラブ定款 第18条 会費：

この意義については既述しましたが、クラブに入会する条件としての、即ち、そのクラブの定款細則を順守し拘束されることを受諾する意味での誓約金としての「入会金」は徴収してはならない、ということと解釈できます。

2013年版ロータリークラブ定款では第11条に、入会金納入を新入会の条件として定められていました。入会金0円は定款に違反していたこととなります。今回、その条件が廃止されたのです。

初年度会費の内、新入会準備費用としての「入会金」があっても問題はないでしょう。但し入会に際し、いかなる名目でも「一律寄付」を条件付けることは、ロータリーにおける寄付の原則に反すると考えます。

2016年版 ロータリー章典 5.020.2. ロータリー財団への義務的寄付の禁止

ロータリー財団は、自発的寄付を原則として発展してきた。財団への寄付を会員の資格条件としてはならず、これを資格条件として言及するいかなる文も、会員入会申込用紙に記載してはならない。クラブが財団への寄付を会員資格とするような細則を制定することは禁じられている。会員証にこのような寄付について言及することは、一切認められない

<北川コメント>

会費と入会金

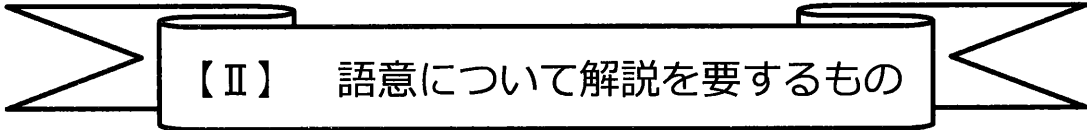
誓約金としての会費はとても重要な意味をなしています。例会参加する権利を得られることこそが最大の特典。そのためのクラブへの誓約金。

会費を意味する due は副詞になると duty ですので、単純に義務金だと思われがち。しかし、ロータリーの場合は、英文に By payment of dues と会費を払うことによって原則を受諾（受け入れ）accept し、受諾（同意）submit to and agree to するとされ、さらに従い be bound by とされていることはとても重要だと思います。特に be bound by という表現は拘束されるという意味であり、会費はクラブとの契約であり誓約の証であることを改めて注意深く感じ取る必要性を感じます。

では、入会金は何になるのでしょうか？「入会（のための準備）金」という意味ならば、問題がないように思います。各クラブによって、入会準備が異なるのはクラブの個性の範疇。その意味での入会金の有無は各クラブに委ねられているといえるでしょう。

特典

My Rotary に Reward を特典と訳されていますが、これは Privilege とまったく異なるもの。My Rotary の特典 Reward は、割引などの特典を意味しています。一方、クラブ定款の特典である Privilege は特典は、特権という意味が強くなります。この違いは強く認識する必要があります。



【Ⅱ】 語意について解説を要するもの

A 頻用されるもの

1) 欠席補填= Make up

メイクアップを、出席補填と思っている人は多い。Rクラブ定款 第 12 条 第 1 節に規定が示されている。「…次のような方法で欠席をメイクアップしなければならない。」文字通り She is very much made up. で、和訳漢字は「糊塗」とでも？

欠席を糊塗する目的ではなくて、他クラブの例会へ出席することを、すべてメイクアップと言っていることが多い。正しくは、Visiting=クラブ訪問、(ガバナーがクラブの行事に出席すれば公式訪問)。

クラブ理事会は、会員が、ガバナーの承認する委員会、地区大会、IMなどの行事に参加したときには、規定により「出席クレジット」を付与する。地区の側から言えば、この会合がガバナーの承認した「出席クレジット」を認め、例会と同等の価値がある「欠席補填」に相当する会合であることを証明するカードを発行することになる。

他クラブの例会への Visiting の際は、それがメイクアップの目的ならば、自クラブの幹事に「自己申請」すればよいことになっている。訪問先の幹事は、来訪したことの報告を来訪会員の所属クラブ宛に送ることもできる。㊦

メイクアップを認めるのは、本人の所属するクラブ理事会である。RI でもガバナーでも地区でも、ない。

④

1998年版手続要覧に記載されていた「自己申請」は、一枚の紙切れよりその言葉が信用される、ロータリアンの信頼性を認めた制度であると思います。この「信頼性」がロータリーの誇りステータスと言われていたものですが、自らそれを放棄する例があります。最近のロータリーには、Statusがなくなったなどと言われますが、Statusは与えられるものではなく努力して獲得するものではないでしょうか。

例会出席は、例会時間の60%在席しなければならないと定められています。早退(Eat and Run)するときは、厳密には、後でその理由を届け出て、クラブ理事会が正当なものであると認めた場合に出席が承認されるものであり、ロータリアンの信用にかけて、届け出がなくても承認していると理解しています。メイクアップのために、他クラブの例会を訪問した時も同じです。(2016年版 ロータリークラブ定款 第12条 出席)

・・にも拘らず、メイクアップに来て食事がすむや否や、さっさとしかも堂々と、SAAや幹事に断るところか同席者にさえ挨拶もせず席を立つ人(ロータリアンに非ず、ただの会員)をみかけることがあります。これが、定款違反だとは思ってもみないようで、ロータリークラブ定款など「読んだ=見た」こともないのでしょう。規則を別にしても、それが訪問先「クラブ=理事会」を軽んじる、どんなに無礼なことか、その人のロータリーの常識にはないのでしょうか。例会場は、レストランではありません。

そのうえ、当人の所属クラブが「そんな程度か」と思われても仕方ありません。(個人的には、どんなに社会的に偉い人でもロータリアンとしてのお付き合いを、文字通り敬遠させていただいてきました。)

日本のロータリーが誇る例会と「出席尊重=ロータリアンの信用」の伝統をないがし蔑ろにする行為です。もっとも、そのようなマナー違反を注意しない地区やクラブのリーダーの責任でもあります。

かつて、「早退するようなメイクアップは認めない。月信の出席報告を白紙にする」と宣言した2630地区のガバナーがありました。今それを言い、マナーを正す勇氣あるリーダーはいるのでしょうか。

しかしこの解決は簡単で、訪問先クラブが、例外規定のないRクラブ定款を採択していれば、週報の来訪者欄に記載せず、本人のクラブ訪問通知を所属クラブへ送らなければそれまでです。この制度は現在、クラブが自由に細則で定めることができますし、定めておかななくてはなりません。

早退するなら、クラブの恥さらしに行かない方がよいでしょう。今日では、パソコンの
中にも例会があります。「Rクラブ定款の例外規定をクラブ細則で規定したクラブ
＝日本のロータリーの伝統を堅持しないクラブ」を選べばなんら差支えない問題です。

2) 出席 = Attend と参加 = Engage

ロータリークラブ定款 第12条 1節

「各会員は本クラブの例会、あるいは細則により定められている場合は衛星クラブの
例会に出席し、本クラブの奉仕プロジェクトおよびその他の行事や活動に参加するべき
ものとする。・・・」

この用法で、出席と参加の区別が解る。しかし、この条文は例外規定を許されているの
で、クラブ細則で如何様とも改定できる。また、このままクラブ細則に取り入れたと
しても、「べき」=should である。

出席か参加か、クラブの二極分化を象徴する言葉である。

多様性の価値観のもとに、どちらもロータリークラブとしての存在は変わらないが、
会員自身がどちらのクラブを選ぶかを決める時代となった。現在、移籍は全く自由で
あり、「自分のロータリー観とクラブの性格が一致するクラブ」を選ぶことができる。
e-クラブならば、人間関係も考慮の必要は少ないであろう。（既述）

<北川コメント>

出席

クラブで例会に 100%出席を強要するようになると、それに耐えられない人が続出し、
クラブの崩壊を招く可能性があります。どれくらいの人数が出席しているのかという
数字の競争は、あまり意味のない方向へ走りがち。本来は、100%出席を義務化するの
ではなく、クラブメンバーが 100%出席をしたくなるような魅力ある例会作りが本義の
ように思えます。その結果としての 100%近い出席率は意義のあることでしょう。

出席か参加かと、各クラブが方向づけるのではなく、会員自身が選ぶ時代なのかもしれ
ません。だからこそ各クラブの理事にはクラブメンバーが積極的に出席したい例会に
なるように工夫することが求められます、この内なる充実は本当に重要です。これが
できれば、間違いなく「最も多く出席したものが最も多く報われる」となるはずで

3) 出席免除 = Excused absence

ロータリークラブ定款 第 12 条 第 3 節 (b) の規定は、(クラブ細則でこの規定を採択すると定めてあれば) よく知られた制度であり、出席既定の免除の適応を受けている会員も多い。

但し、「例会出席を重んじる歴史と伝統を誇るクラブの解釈とは、異なる解釈」をしているクラブのあることを知った。例会出席義務を免除されているから「例会には出席しなくてもよい」という解釈である。これは、ロータリーの原則からは成立しない。

「自分は、高齢になり病気がちになった。毎週出席できないこともあると思う。会長を始めクラブ奉仕委員会(相当委員会)が努力して計画し、会員が挙って出席しようとしている立派な例会に欠席しては申し訳ない。だから、出席免除を申請する。」のであると教えられた。まさに「欠席しても許してネ」である。

多人数会員を擁している歴史の永いクラブでは、出席免除会員の人数も多い。誇るべき伝統として「出席免除者の出席率」が、毎例会発表され、時に通常の出席率を上回ることすらある。

少なくとも現在の時点では日本で、このような「理念」を守るクラブは力強く栄えている。

さて将来、参加型か出席重視か、どちらのクラブが発展してゆくのだろうか？

4) 寛容 = Tolerance/Toleration

寛容：

日本語大辞典では；心がひろくて、他人の言動をよく受け入れること。

他人の罪過をきびしくとがめだてしないこと。

大漢語林で；心が広く人の失敗を許すこと。ゆったりとしてこせつかないこと。

新和英大辞典で；・・tolerance・・(寛容な=tolerant 寛容するtolerate)

tolerance：

Random House には；1)

①(他人の見解や行為に対する) 寛容、寛大、容認。

②(偏見にとらわれない) 公平さ、独断的でないものの方

Tolerance が、他人の見解などに対する寛大な態度や精神を指すのに対し

Toleration は、自分の気に入らない行為を黙認する「許す」という行為を指す

2) 我慢、忍耐(力)・・

toleration :

Random House には ; (悪などに対する) 寛容、寛大 (特に、実際には黙認しがたいことの) 黙認、容認、大目に見ること。・・・

1911年1月に創刊された、The National Rotarian (現 The Rotarian)掲載の Paul Harris の論説では、toleration が使われているとのこと。その時代背景をみると、納得できる。

<北川コメント>

Toleration と Tolerance の違い・・・寛容

「寛容」という言葉は、明治時代まではまったく別表現をしてきました。それは「忍耐」「辛抱」です。英語の辞書からすると、我慢が toleration であり、忍耐が tolerance と言えるでしょう。

最近では、「我慢」という言葉を使うことが多いようですが、我慢とは仏教用語で、「我が慢ずる」、つまり煩惱の極みを意味する言葉です。いつかは誰かに復讐してやるという気持ちを持って頑なに殻に閉じこもることが我慢です。仏教では復讐心を持つことを強く諫めています。一方、辛抱や忍耐は、我慢と対極のもの。復讐心を一切抱くことなく、懐深く幅広く受け入れることが辛抱であり忍耐です、まさに寛容さが前提。ところが、世知辛い世の中で、寛容さが失われ、辛抱や忍耐という言葉が消え去り「我慢」が横行してしまっています。

臥薪嘗胆という言葉がありますが、これも日本では誤用されています。中国や韓国では復讐するまで我慢するということ。日本人の感覚とは随分と違います。しかし、最近ではリベンジという言葉が軽々使うようになり、日本人の持つ寛容さが消えつつあるような気がします。リベンジも復讐心が前提ですから、英米人はあまり多用しません。アメリカ人の友人に「日本人は寛容な民族なのに、なぜリベンジという言葉が好きなの？」と真剣に問われたことがあります。

ロータリアンは、「我慢」はせず、寛容な心で深く受け止め「辛抱」「忍耐」する人物であってほしいと強く願います。

5) 社会奉仕 = Community Service

社会 :

日本語大辞典では ; 1) 人々がより集まって共同生活をする形態。また、特に 1875年

(明治 8 年) 福地源一郎 (桜痴) が英語の society の訳語としてこの語を用いてから、近代の社会学では、自然的であれ人為的であれ人間が構成する集団生活の総称として用いる。・

Community:

Random House には ; ・ ・ 一つの場所・地域・国に住み共通の意識に支えられた集団を意味する。

1) (しばしば文化的・歴史的遺産を共有する) 地域共同体
生活共同体 ・ ・

Society は : 制度や、秩序に重点を置く。

・ ・ 宗教・慈善・文化・科学・政治など共通の目的を持つ会・協会・
団体・組合

社会という概念は決議 23-34 が発表された当時、あらゆる対外的奉仕活動の全てを指す言葉であった。即ち、Community という言葉は、家庭、職場、業界、町、国といった共同体全体を指す言葉であったと言われている。(田中毅 PDG)

四大奉仕の概念が明確になってきたのは 1927 年であり、これによって社会奉仕の範囲は、クラブの所在地域、即ち、クラブの奉仕活動がその力の及ぶ範囲(あるいは行政区域)に限定されることになった。

したがってクラブの側から言えば、所在地域に対するクラブの存在価値を示し、独自性の旗幟を掲げる重要な意義を持つこととなったと言えよう。また一方、地区の社会奉仕委員会が単独で独自のプロジェクトを行うのは、まったく誤解も甚だしいとすることができる。

現今のボーダレスとなった社会構造 (borderless society) にあっては、ここに述べられた概念に奉仕活動を分類すると無理を生じることが多いが、CLP の考え方に従えば解決することができる。(既述)

社会奉仕のきっかけとなる考え方を最初に説いたのは、1906 年、フレデリック・トウイードとドナルド・M・カーターであり、この後、いわゆる親睦か奉仕かの論争が起こった歴史的イベントは有名である。

クラブの所在地域や行政単位をその範囲とする社会奉仕に対し、世界社会奉仕 (WCS) という RI プログラムがありましたが、2011 年 6 月 30 日をもって廃止されました。

6) 「・・・すべき・・・」

手続要覧やロータリー章典に「・・・すべき」という和訳がされているが、義務か任委か迷いやすい日本語である。RI 定款 第 15 条に規定された原文（英語）は Should であり、任意である。

規定の文章には、両様に解釈できる多彩な用法の日本語を使うべきではない（べからず）と思う。日本語独特の、ベールのかかった言い回しの代表格であり、注意書きがあるか、なければ原文を調べないと、日本語だけではどちらの意味が解らない。

べき：

「べし」の連体形

日本語大辞典では；「べし」にはきわめて多くの用法がある。

- 1) よろしい状態として是認する意を表す。㊦ 適当であるという判断を表す。・・・するのがよい。㊧ 当然のこととして義務として判断する。・・・しなければならない。

以下 2300 字に及ぶ解説がなされている。更に助詞がついて、いろいろな意味を表している。

<北川コメント>

should

should の使用法は中学英語で、ほぼ「義務」として教えてしまっているところに問題があります。may（しても良い）と have to（せねばならない）の間で、やや may よりの意味で、「したほうが良い」程度の意味が原義ですが、これを理解していない人は少なくないようです。

7) CLP クラブリーダーシッププラン

詳細は各種資料参照。誤解されやすい言葉なので、日本のクラブに導入するに際しての三大要点のみ記述する。

- 1) 継続性：今まで単年度制であったものに、指導と奉仕活動の継続性を導入。
例；クラブ委員会委員 3 年任・理事等の任期も細則で規定可能。
- 2) 何事も全会員参加：ロータリーの二大欠陥伝承伝達の改善、情報伝達の重要性。
- 3) 五大奉仕概念の変革：奉仕や委員会の分類から理念へ。一つの奉仕活動はいくつかの五大奉仕理念が混在して成り立っている。

例；委員会名は奉仕活動の具体的な内容を示す名称で。クラブの体力に応じた
委員会数で可。㊸

㊸

地区は、DLPによって、委員会の名称・内容ともに規定があり、義務付けられています。
したがって、CLPを導入しているクラブの委員会と名称は一致しません。地区研修・
協議会や、地区委員会主宰のセミナーなど、地区からクラブへの出席要請者について、
所属委員会の名称など旧態のままではCLPの趣旨に反することになり、工夫されなけ
ればなりません。地区が指定して要請するのではなく、クラブが出席者を選ぶような
方法を考えるべきでしょう。いずれにせよ、出席義務などという言葉はロータリアンの
心意気に反します。

B 頻用されないが誤り易いもの

1) General Officers of RI = RI 中央役員と Officers of RI = RI の役員

例えば、「ガバナーは、地区における唯一のRIの役員である」と「の」を忘れてはい
けないようである。RI定款 第7条 第1節 Officer 役員 参照。

この他に、RI中央役員という役職があるので要注意。

RI中央役員は；会長・副会長・その他の理事会のメンバー（会長エレクトとRIの財務
長を含む）・事務総長。

2) Rotary Organization = ロータリーの組織と Rotary Entity = ロータリー組織

前項同様、「の」のあるなしで、全く違う意味になるので要注意。

前者は一般的な意味で使うが、Rotary Entity とは；

2017年1月版 ロータリー章典

13) Rotary Entity/Rotary Entities:

Rotary International, The Rotary Foundation, a Rotary club or group of clubs,
a Rotary district or group of districts, a Rotary Fellowship, Rotarian Action

Groups, and administrative territorial units of Rotary International. Individual RI Programs are not considered Rotary Entities.

RI 定款 第8条 第3節 に、・・・Rotary Organization を「ロータリー組織」と和訳してあるが、ロータリー組織という日本語の原文は、Rotary Entity・Entities。

「ロータリーの組織」と訳すべきではないだろうか。

3) ロータリー・シニアリーダー = Rotary Senior Leader

現元次 RI 会長・現元次 RI 理事・現元次 R 財団管理委員を指す。

パストガバナーなどを尊称の意味でシニアリーダーと言うことがあるが、厳密には誤りのようである。(ロータリー章典 1.040.15.)

4) 特別

期間限定の意が強い。特別委員会とは、要に臨んで組織され、目的達成を以て解散する意。規定外の扱いの意がある場合もある。特に重要との意味はないようである。

5) 1年の任期を3年(3年委員)

1年の任期とは；毎年、RI・地区・クラブのそれぞれが定められた規定に基づき、ならびに本人の意向によって、引き続き時期も就任するかどうかを決定することであり、そのどちらにも問題がなければ次年度もその職務にとどまり、3期連続同職を続けることができるという意味である。その間どちらかに問題があれば、自動的に任期終了となる。

特例として、地区委員会委員長にパストガバナーが就任するような場合などに、3年の任期を毎年の審査を必要とせず継続して就任できる規定もある。

この任期の規定には必ず、3年の任期終了後の再任の可否が定められている。

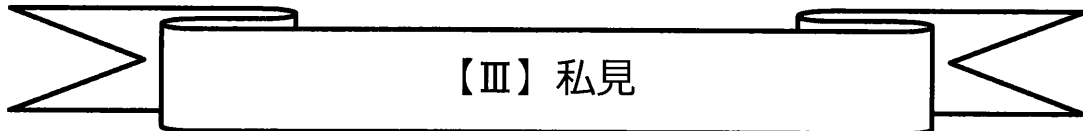
6) 徽章

徽章 = Emblem : ロータリアンであることを示すための印。

バッジ = Badge : Lapel button・Lapel Pin ; ラベルバッジ (ラベルバッチに非ず！)

記章 = Insignia : バッジ・ワッペンなど、一般的な印。

さまざまな規定があるので、要に臨んでは、RI 細則 第 19 条・ロータリー章典該当項必読。



1) Object of Rotary = ロータリーの目的 (綱領)

Object

Random House には ; 「目的」の他見合う訳語はない。

綱領 :

大漢語林には ; 1) 最も重要な点。主要な眼目。 . .

2) 団体の立場・方針・守るべきことなどを、要約したもの。

日本語大辞典では ; 1) 物事の主要なところ。 . . すべてがそれに従属し。その中に含まれているある法則の要約と最も主要で本質的なもの。

2) . . 団体活動のよりどころとなる基本方針。その主張、目的、政策、あるいは実践の規範などを示したもの。

ロータリー活動の「基本理念・目的・実践の規範」を表す漢字として「綱領」と和訳した、先賢の思い入れを感じます。目的の方が、訳語としても直截な表現ではありますが。

「ロータリーの目的はロータリーの目的の中に書かれている」という、語り言葉としての用法はどう表現すればよいのでしょうか？ また、object と objective についても一考の必要があるようです。

<北川コメント>

object

言語学的には object とは目的語を意味します。言葉を変えれば対象物。概念というよりは具体的なもの。

『ロングマン英英辞典』によると、object は「計画や行動や活動の目標」を意味し、objective は「到達が難しい目標」とされています。ですから Objective of Rotary ではなく Object of Rotary です。

今の時代には object の訳語は「目的」のほうが分かりやすいかもしれません。しかし Object of Rotary には遂行項目が列挙してあります。それをとらえてロータリアンの先人は Object を「綱領」と素晴らしい意識したのではないのでしょうか。

『広辞苑』には「綱領」は「①ものごとの大切なところ。眼目。②正統・労働組合などの団体の立場・目的・計画・方針または順序・規範などを要約して列挙したもの。」とされています。この『広辞苑』の「綱領」の意味を見る限り、object は「目的」という言葉よりも、「綱領」のほうが分かりやすいように思います。ロータリアンの先人の知識の豊富さが見られます。

2) 事実か真実か？ 公平か公正か？

四つのテストの和訳には、いろいろな意見がある。その中で、表題の和訳を主張する意見は一考しなければならない。

Truth:

Random House には； 1) (物・事の) 真相、事実、実状、・・・

2) 事実[現実]に一致していること。真実であること。・・・

真実:

新和英大辞典では； truth・・・。事実の英訳に truth はない。

大漢語林には； 1) まこと。うそいつわりのないこと。・・・

日本語大辞典では； 1) うそでないこと。いつわりでないこと。・・・

事実:

大漢語林には； 1) 本当のこと。事の真相。

2) 誠実であること。

日本語大辞典では； 1) 実際にあった事柄。現実にある事柄。真実のこと。・・・

英語日本語共に、用法上では明確な差がない。したがって、どちらを選ぶかは、他の要因を検討しなければならない。

Fair:

Random House には ; *adj.* . . . 1) 公正な、公平な、 . . . どちら側をも公明正大に扱う意。 . . . 以下 18 項目の用法。

新和英大辞典で ; 公平も公正も . . . fairness.

公平 :

日本語大辞典では ; 判断や行動が公正で偏っていないこと。

大辞泉で ; すべてのものを同じように扱うこと。判断や処理などが、かたよっていないこと。

用法 ; 公平・公正 . . . 平等に扱うの意では、相通じて用いられる。

「公平」は、ものごとが偏らないようすることの重点があるのに対し「公正」は、不正やごまかしがないことを主に言う。

公正 ;

日本語大辞典で ; 公平でかたよっていないこと。明白で正しいこと。 . . .

大辞泉でも ; 同上。

2016 年版手続要覧のミスプリントに端を発して、一時盛んに論議された。

英語的感覚 (この表現が許されれば) からすれば ; 「事実かどうか ? みんなに公正か ? 」

であろう。日本語的感覚からは、「真実かどうか ? みんなに公平か ? 」である。

真実かどうか ? に、公正か ? を続けることは、同じことを繰り返して訊くことになり

日本語の用法上問題がある。㊦

また、現行の日本語訳は 1954 年に公募されたものの中から、東京ロータリークラブ 本田親男会員 (毎日新聞社長) の訳であるが、訳者が、「平等」と「公平」の概念に考えが及んでいたであろうことは容易に推定される。これは、関係者すべての「利潤の取り分」に関することも含まれるところから、平等 (現代語として ; 均一・均等) に同じ金額を分配したのでは公平と言えない。例えば、兄弟でケーキを切り分けるとき、同じ大きさにきり分けるのが「平等」で、年齢や体重に従って大きさを加減するのが「公平」のように考えられる。

さらに、これほどに日本のロータリアンに親しまれている理由の一つとして、日本語の話し言葉としての「美しさ、発声のし易さ」がある。

言行は・これに・照らしてから = 5・3・6

真実か・どうか = 3・3

みんなに・公平か = 3・3

好意と・友情を・深めるか = 3・3・5

みんなのためになるかどうか = 7・3・3

ゲンコウ・シンジツ・コウヘイは4文字であっても3音で発声する強いイントネーションを可能にする言葉になり、第4節でリズムが変わるところなど、全体が歌詞としても通用する日本語の、美しく力強い話し言葉である。四つのテストが日本のロータリーにおいて、文字通り人口に膾炙^{かいし}した理由ではないだろうか。さらに、上述の和訳が、単に商売上の問題のみならず、「人と人との和」を良好に保つための格言としても通用する真理を表しているからでもあろう。

確かに、原文の英語からは「甚だしい意識」であろうが、もし、忠実な直訳であったらこれほどに親しまれたであろうか？

しかし、職業繁栄の座右の銘として理解するためには、原文（英語）を精読する必要がある。

㊦

このような用法上の問題は、和訳の際の留意点です。ロータリー関連では「会員増強維持」など、Membership Development and Retention をそのまま訳してしまうことがあります。が、「増強」=増と強=数を増やすと同時に、その内容を強化する意からすれば、「早朝朝まだき」の感がします。米国でのR I直轄のセミナーなどでは、Development を単なる「増員」の意味に使っていました。

<北川コメント>

真実・事実

奈良時代から江戸時代までの約1200年の間、日本人が用いた「理」とは「真理」を意味する言葉でした。真理とは目に見えない絶対的な世界。仏教用語では、別名を法性とも言います。法（ダルマ）の本質という意味です。

一方、その理と対極にある言葉が「事」、すなわち「事実」のことです。目に見える現象世界を意味する言葉です。仏教用語では「諸法」と言います。

その「真理」と「事実」の両方含む言葉を「事理」といい、または「真実」「法」と言います。つまり「仏法」という言葉は、「仏が説いた真実の教え」「目覚めや気付きの真実の教え」を意味します。

これらは仏教用語からの流用ですが、「真実」と「事実」では明確な違いがあります。

目に見えない「真理」の反対ことばは、目に見える世界である「事象（現象）」です。「事象」は「事実」とも言います。「真理」は変化しないものであり、「事象（事実）」は変化するものでもあります。その「真理」と「事実」の両方を含んだものが「真実」です。

もしも、四つのテストで、「事実か否か」とすると、あくまでも目に見えるものばかりであり、その奥底にある「真理」を見逃してしまいます。ロータリアンは目に見える事実だけに振り回されることなく、「事実」を見つめそれを通して、むしろ「真理」に基づいて活動すべきもの。ですから、「真理」と「事実」の両方の意味を含んだ「真実」が妥当ではないでしょうか？ちなみに真実の反対ことばは虚構であり虚偽です。また英語を見てみますと、四つのテスト第一の” Is it the TRUTH ?” では、TRUTH を敢えて大文字にしてあることから、単純に現象的な「事実」とするのではなく、目に見えない「真理」と目に見える「事実」の両者を表す「真実」ということばを用いることは意義深いと思います。「真実」と翻訳された先人の智慧を感じさせられます。

3) ニコニコ Box (スマイル Box)

起源には諸説ありと言われているが、この日本で生まれた「寄付」の在り方は、ロータリーの本質に沿った在り方である。即ち、これこそ「ロータリー本来の寄付」の在り方である。

年会費について、クラブの側から厳密に分類するならば、(会員の側からの意義は既述)

- 1) このクラブが、RIの会員であることの左証として、人頭分担金、RIの組織である地区などへの賦課金。
- 2) 公式雑誌購読費。
- 3) クラブ運営費。

以上であり、奉仕活動資金や食費などは含まないのが本来の在り方と云えよう。

この奉仕活動費に充てる資金は「寄付」即ち、各々のロータリアン個人の善意によるものでなければならない。これが、I serve の現れの一つである。

我々の先賢、前原勝樹 PG の「ロータリー入門書」s 4 8 年版の帯にある言葉は、綱領を实践する態度について、「もし善意というものがなければ、ロータリーはただの社交クラブだ。職業はただの金儲けでしかなく、社会奉仕というも施しにすぎず、国際奉仕は外交以外のなにものでもない。」と書かれている。

同書の、ニコニコ Box 委員会の項ではこのように述べられている。「会費には、奉仕費は含まれていない」即ち、植樹の計画があるとする。厳密に言えば、打合せ費・調査費・当日の飲食費は運営費でまかない、樹そのものの代金はニコニコ Box の寄付金から支出するのが本来の姿であると言われている。

あらゆる奉仕費は、ロータリアンならば誰もが、指示されなくても自発的に必ず行う善意の寄付に依るのが I serve、即ち、一定の金額を義務的あるいは何らかの資格条件にして徴収するのではない。定められた金額の寄付金を一律に会員から徴収して奉仕活動を行うのは、非ロータリーの We serve であると言えよう。

無論、会員の合意があれば、会費と奉仕費とを同日に合計金額で徴収することは便宜上差支えなからうが、会員も会計担当者も、この辺のけじめをはっきり認識しておくべきである。

いずれにせよ会員の篤志からの金額も一定でない「寄付」を、全会員を対象とする運営費や飲食費に充てたり、周年記念の祝宴費などに流用することがあれば、まったくロータリーの精神を理解せず、寄附した会員の奉仕の心を踏みにじる「許されざる行為」であると断言できる。不足ならば、別途全会員一律に一定金額の特別会費を徴収すれば問題なからう。

<北川コメント>

ニコニコ BOX

ロータリークラブによっては年間の最低金額を決めているところがあります。しかし、会費は契約費であり義務が生じますが、ニコニコ BOX に義務は生じてはならないもの。義務ではないニコニコ BOX について、各クラブでどういうものなのかを明確に規定する必要があるのかもしれません。

4) 集団と団体

集団：

新和英大辞典で；group.Mass.

大漢語林で；多くの人が集まること、また、その集まり。

日本語大辞典では；1) 集まって団体を作ること。

2) 人、また、ものが集まってできたかたまり。団体。

団体：

新和英大辞典で；1) (一団) party company group・・・

2) (組織的) organization corporation association・・・

大漢語林で；共同の目的をもって結合した多人数の集団。・・・

日本語大辞典では；1) 多くのものが集まって一つの仲間となったもの。

2) 共通の目的を持った者が、意識的に結合した集団。法人・政党など。

以上データから、**ロータリー語**としての概念を規定すれば：

集団；一つの理念の下に、個々の意志で加わり、統括されない集まり。

即ち、ロータリー。

団体；共通の目的の下に参加し、統括者の命令を遵奉する組織。

決議 23-34 2) 「・・・その実例を団体で示すこと。」・・・to give , collectively, practical demonstrations of it・・・は、集団と訳すべきであろう。

同 6) g 「ロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられた・・・」即ち「集団的奉仕活動は、個人的奉仕活動の訓練である」と述べている。この時代の社会奉仕は、対外的奉仕の全てを指し、職業奉仕もその範疇にあると考えてよいであろう。(既述)

イベントが開催されたとしよう。そこへ行くのに、貸し切りバスで行くために、一律の費用を集めてゆく方法もある。乗った人達は、椅子に座ったままバス任せの団体行動である。

自由行動で、現地集合の人たちもいる。自家用車、タクシー、路線バス、自転車。費用は、各々まちまちである。しかし、必ず会場へ「行く」即ち、必ず「寄付する」ことは、疑う余地はない、即ち、信頼されている。ニコニコ Box の寄付はこの形である。そして、I serve と We serve の在り方に似ている。

5) I serve と We serve

I serve という言葉の歴史については、本田博巳 PDG の月信 Vol.7 および、刀根荘兵衛 PDG の月信 Vol.6 に詳しく記載されているが、深く研究されていて感服。私も、ここで学ばせていただいた以上の知識はない。

また、刀根莊兵衛 PDG をお願いして調べていただいたところ、1920 年代の手続要覧、ポールハリスのスピーチまで広範囲に検索されたが、I serve という言葉は見当らなかったとのことであった。しかし、ロータリー文庫の索引から、増田房二 PDG、羽根實 PDG のお書きになったものを見つけて下さった。

増田 PDG は、「アイ・サーブとウイ・サーブ」の表題のもと、「ロータリーにおいては、アイ・サーブこそ本質的なものでありますが、アイ・サーブだからウイ・サーブはやるべきでないとか・そんな〇×的な思考をする必要はない・・・。」と結論しておられる。本田 PDG も、「二元論を克服しよう」と言っておいでだが、全く同感。

本田 PDG も、刀根 PDG も、I serve という言葉は、「職業奉仕の大切さを解くために、後世、日本的解釈が付与されたのであろう。」とお考えのようで、私もこの説に賛成。

「職業奉仕理念は I serve を以て実践する」ものであることは間違いのない事である。寄付が少なく都合悪いときや、汗を流す集団奉仕に参加したくないときなどに、「ロータリーは I serve だよ。」と言うと、なんとなく相手が引っ込んでしまうので、口にして憚るところなく、一般にはその程度の使われ方にしか考えられていないのが、実情ではないだろうか。それは、I serve が、「We serve と相対する意味の言葉」、即ち、「一人でする奉仕活動と皆で揃ってする奉仕活動」くらいの薄い意味付けの程度にしか理解されていない、ということではないだろうか。

「I serve」に、深い意味が「なかった・与えられていなかった」にせよ、即ち、この言葉の意味が「近世日本で付与されたもの」であったとしても、ロータリーの本質を表すロータリー語としての価値が損なわれるものではない。

たとえば、Service Not Self から発生した Service Above Self の原典（一次文献）が明確でなくても、「超我の奉仕」が重要なロータリー語であるように。

人に、心があり、それを容れる姿があり、それを現す行動があるように、職業奉仕にもその理念（心）があり、地区やクラブに職業奉仕委員会（姿）があり、ロータリアンに対する訓練と一般社会への普及を図るプロジェクト（行動）がある。個人奉仕の訓練や広く社会への普及は、「集団＝クラブ」として実行せざるを得ない。ただ、このような意味の集団的奉仕活動は、本当の意味の「We serve の理念」ではないと考える。

I serve の “I” は、集団に加わった「私＝我」である。超我を志す主体性のある「我」である。I serve をロータリー語として和訳すれば、「超我の我在りて奉仕す」。

We serve の “I” は団体に従属した「我」である。指揮命令通り全員揃って、一律の寄付をし、滅私の奉仕をしなくてはならない「我」であろう。既述の、決議 23-34 6) g は、この関係を説いている。

即ち、一人で奉仕したから “I serve” 。大勢で奉仕したから “We serve” ではない。両者は基本的に、その理念(哲学)が異なるものであり、ロータリーにおいて “We serve” はありえない。

二つのモットーの中の「Self」や「He」という「individual」である「I」こそ「I serve」の「I」である。「没我を至上とする我」ではなく、「我執に囚われ利己心の塊である我」を乗り越えて人のために尽くし、利他の心を育もうとロータリーで修行する「我」が「I serve」の「I」である。

I serve は、訓練によって「個=我=I」が磨かれ、その個が集まって訓練によってより高い個となり、このサイクル絶え間なく、ロータリアンである限り、天寿退会まで続けられてゆく未完結的であるのに対し、We serve は、皆の力を結集して行う一つ一つ完結的な奉仕活動の積み重ねであるように考えている。

無論、両者の善悪・尊卑を問うているのではない。

I serve を小著の題名にした根拠は、Harold Thomas の名著ロータリーモザイクに収録された Chesley Perry 事務総長の言葉である。

「ロータリーの偉大なる機能は、各個人を個人として、また広く社会一般の一員として、また各個人々々がそれぞれ所属する他の特別の組織の一員として、より良き奉仕ができるように訓練するにある。」松本兼二郎 PDG 訳。

I serve という言葉は使われていないにせよ、個人奉仕と集団奉仕との関係について、この言葉の中で、根源的な理念を学ぶことができる。

この項の終わりに：

- 1 I serve という言葉は、過去の公式の文書には見当たらない。したがってこのロータリー語の概念を、次のように規定してもよいと考える。
- 2 I serve の「I=我=個」は、「超我の我=I」である。主体性を持った人間として厳然と存在するロータリアン「我」の姿である。
- 3 I serve は職業奉仕を語る言葉であるが、それ以上に広く深い意味を持ち、この言葉を解明することによって、ロータリーの本質に迫ることができる。

<北川コメント>

I serve と We serve

We Serve を表明する団体は、没我の活動としての We Serve を最大の活動方針としています。ですから寄付金を集め、団体としての物質的な貢献を重要視しています。それに対して、ロータリーは I serve。

しかしこれは活動を表す言葉ではなく、あくまでも理念であるということ。ですから、I serve は We serve という活動を否定しません。むしろ、活動として I とか We とか区別しすぎることはロータリーではしないというのが基本。この I は「我執」の I ではなく「超我」であることが望まれていると思います。

原語の英文と翻訳の日本語

仏教でも原典を大切にすべきか、翻訳を大切にすべきか、という問題があります。明治になり西洋文化が入り、サンスクリット原典を絶対視する傾向が強くなり、翻訳したものを軽視する時代が長く続きました。ところが最近では逆で、「各宗旨宗派が独自の色を出すことができたのも、漢訳があつてこそ。そこに各宗旨のオリジナリティがあり、そこにこそ大切なものがある」と言われるようになってきました。もちろん原典を知っていて、あえて解釈では翻訳を選ぶというものです。仏教経典は、中国哲学を通した漢訳があつたからこそ、インドと中国そして日本の三国が融合し、最前線の仏教が日本で花開いたというのが最近の学説です。

日本語は文脈を最も大切にする文化で、ドイツ語は最も文脈を不要とする言語。英語も文脈をあまり重要視しない言語。ですから翻訳に際しては、ドイツ語や英語は、直訳するとかえって文意が通じなくなります。だからこそ、あえて大胆に言葉を変換せねばなりません。むしろ直訳より意識のほうが増す場合が少なくありません。

ロータリーも原文を知りつつ、大胆に日本的に解釈することは重要に思えます。ロータリーの生まれた国以上に「貴きロータリー精神を持った国」であるためには、直訳ではなく、大胆な言葉遣いが必要に思えます。ただし暴走するとまったく原意と別物になってしまうので、原文を読むことはとても重要です。

英語の原文を知っていて、あえて伝統的な文化に根ざした訳語を選ぶ、そこには英語圏にはない、日本古来からの知恵が凝縮されているのではないのでしょうか。

謝意

浅学の身でありながらこうした貴重な場を与えてくださった服部 PDG には深く感謝いたします。少しでもロータリー発展の役に立てれば幸甚です。

本稿の文章を引用される場合は、出典を明らかにして頂くようお願いいたします。ご連絡などは下記へ。

georamis@hattori-one.com